

書簡が語る真相

松井佐渡守の立石合戦

秀吉が豊後国に布石を打つ

豊後国は、文禄二年（一五九三）五月、領主の太友吉統〔義統〕が朝鮮で演じた失態を理由に秀吉から改易されて太閤蔵入地になった。

これよりさき、豊薩戦争で初めて九州に足を踏み入れた秀吉は、博多・長崎・府内など海外貿易で繁栄する町々を見聞して、改めて九州の実体を痛感したことであろう。とくに瀬戸内海という大海道で大坂と直接結ばれた豊前・豊後は、秀吉の九州制覇には欠くことの出来ない一つの拠点であると考えたに違いない。

改易後、豊後国は同年六月、秀吉は宮部善祥坊法印桂俊と山口玄蕃頭宗永に検地を命じ、翌三年、太閤直属の家臣を封じてつぎのような小藩に分割した。

まず大分郡の府内は早川長敏、直入郡の岡には中川秀

成、南部海部郡の臼杵に太田一吉、北部の国東郡の安岐に熊谷直盛、富来に垣見一直、高田は竹中重利、玖珠・日田郡に毛利高政がそれぞれ領主や代官として配置された。豊後国を黒田長政（孝高の子）の所領豊前国とともに太閤の腹心で固めたのである。

秀吉があえて豊後を小藩に分割したのは、一つに鎌倉時代以来的由緒ある旧主太友氏の勢力を吸収壊滅させる目的もあったと思われる。

家康が豊後国に楔を打ち込む

速見郡は検地奉行であった宮部桂俊がそのまま代官となって治めたが、のち杉原長房、早川長敏、福原直高などが入れ代わり短期的な知行主となった。

やがて慶長五年（一六〇〇）二月、丹後宮津十二万石

入江秀利

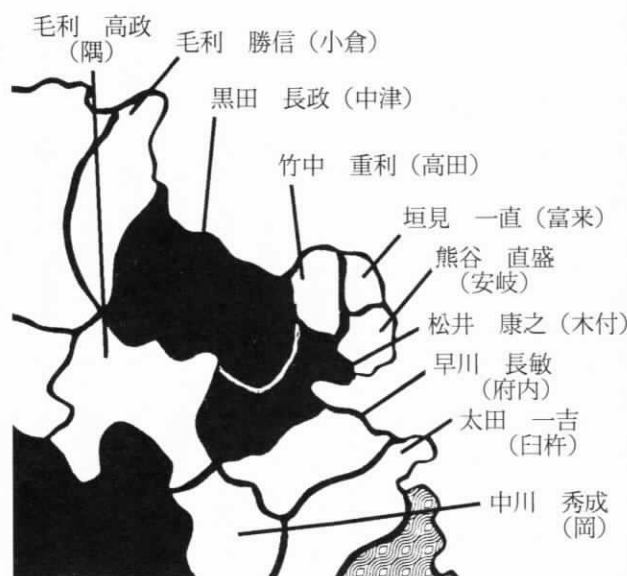
の城主細川忠興が徳川家康の取り計らいで「速見郡・由布院」六万石を増加されて、家老の松井佐渡守康之と有吉四郎右衛門立行を木付（杵築）につかわした。

木付城の請取を命じられた康之は、侍二十一騎、雑兵二百余人を召し連れ丹後久美濱を出発、三月二日木付に着陣した。（『綿考輯録』）以後杵築・日出・別府・由布院は家康の側にたつ細川氏の領地となった。

小藩が分立する豊後で六万石といえば、六万六千石岡藩の中川氏、臼杵藩の太田氏、につぐ大藩であった。

当時、大坂では豊臣政権の安定を図って自からの権力を確立しようとして画策する石田三成と、新たな覇権を樹立しようとする徳川家康との確執が絶えなかった。慶長三年に豊臣秀吉が没した後は、武断派の加藤清正・黒田長政・藤堂高虎・池田輝政など秀吉恩顧の武将は三成を嫌って家康支持を鮮明にし、両勢力の対立がますます激化していた。

細川忠興の豊後六万石の増増は、家康がその支持勢力の強化をはかるうとして、大坂方一色の豊後に関東方の楔を打ち込んだことに他ならない。



木付城主松井佐渡守康之と黒田如水・加藤清正

松井氏は元来足利義晴・義輝に仕える幕臣であった。

松井康之は天文十九年（一五五〇）、松井山城守正之の二男として生まれた。永禄八年（一五六五）、兄の新次郎勝之が將軍義輝とともに討死したのち、康之は同じ

く幕臣で姻戚関係のある細川藤孝（幽斎・忠興の父）とともに十五代將軍義昭の擁立に尽力した。松井康之は初めは細川家の客分として、のちには一門格の家老として細川氏の家臣となった。

その後、細川藤孝（幽斎）は織田信長に仕えた。藤孝が天正八年（一五八〇）に丹後国を与えられ宮津城主になると、松井康之は藤孝から同国久美浜の松倉城を与えられて一城の城主になった。

松井康之は、文禄二年に太閤秀吉から朝鮮の役での戦功を賞せられて、石見半国を与えて直参にしたい旨を伝えられたが、細川家との縁を述べて辞退したので、山城



松井康之

には中央の情報もあるが、なかには康之に対して全面的な支援を約束して

…玉葉取合せ五千放持たせ進ぜしめ候 其許不自由に候へば 重ねて進ずべく候 （八月六日）

と鉄砲の玉葉（弾薬）の援助を申し出たり、八月二十九日付の書簡のように

…若し大友方の百姓なりとも 催て行に及ばるるに於ては 後巻として熊本を捨て候なりとも拙者罷かり出るべく候間 其の心得有るべく候…

若し、石田三成に味方する大友方の攻撃を受けるような事があれば、救援のため熊本を捨てても自ら援軍に向かう、と認められたものもある。

慶長五年五月二十九日、家康の会津遠征の内報を得て忠興は急遽丹後に帰国した。その時、康之は供を願ったが、木付城に在城して両雄藩の庇護のもとに領国の守護

国相楽郡神童村と同愛右郡八瀬村の知行と、茶壺銘深山を与えられたといわれる。

松井氏は細川氏の家臣であるとはいえ、秀吉が認知する格別の家柄であった。

世情の緊迫した慶長五年、豊後国では周囲を大坂方に取り囲まれて孤立無援の松井康之は、家康の傘下にあった。肥後の加藤清正と豊前の黒田孝高（如水）と緊密に情報を交換して知行地の守りを固めていた。

『松井家譜』によると、慶長五年四月十五日、細川忠興は木付に下向し、暫らく滞在して新領内を巡検した。その間、二十四日、黒田如水と宇佐郡の佐田（安心院）で会談して今後の協力について協議した。その時、如水は、一旦有事には松井氏を援護して中津城をも提供するとの堅い約束をしている。家康の会津遠征に際して、康之が長子興長に手勢を割いて忠興に従軍させることができたのも、如水の庇護があればこそであった。

一方加藤清正は康之と特に昵懇で、松井文庫その他に残されている往復書簡は七月二十七日付から九月二十九日付までの二ヵ月間に十五通にも及んでいる。この書簡

するように命じられた。康之は長子興長を供につけて自らは、豊後制庄の要と考えられた木付城の守りを固めたのである。

西軍への執拗な誘い

慶長五年六月、徳川家康は兵を率いて会津遠征の途についた。家康に対抗する石田三成は、同年七月挙兵して諸大名に西軍への協力を呼び掛けた。

木付城を守る康之のもとへも、

徳川家康違背事書 七月十七日

前田玄以外二名連署状 七月十七日

大谷刑部少輔（吉継）書簡 七月二十日

など、西軍からの勧誘の書簡が七通届いている。

「徳川家康違背事書」は、上方で挙兵した石田三成が全国の諸將に送った徳川家康への弾劾状である。この書状には家康（内府）が秀吉に差し出した誓紙に反した違背行為を十三カ状にわたって述べ、結びに

…右誓紙の筈を少も相い立てず

太閤様の御置目に背むき候へは 何を以て頼りこれあるべきや

かくの如く一人ツツ果てられ候ての上

秀頼様御一人取立られ候わんまことしからす候也：

家康のような背信を一人一人許せば、秀頼の将来が不安である。と書かれている。

また、「前田玄以（徳善）外二名（増右・長大）連署状」には

…尚以て 貴所の義は越中（忠興）と相替る義候条秀頼様へ御忠節尤に候 以上

…太閤様の御恩賞相い忘れられず候はば 秀頼様へ御忠節あるべく候…

「越中と相替義」とは、先に述べたように元来松井家は、細川家の配下にあっても家臣の立場をこえた家柄であること。また、かつて秀吉から個別に恩賞にあずかった恩顧を述べている。これは明らかに家康に加担した細

と、松井康之は東軍の味方に二心ない証として、勧誘状を、逐一加藤・黒田両家に報告している。

細川本領（丹後）の危機と松井氏

細川忠興が徳川家康に味方して会津遠征に従軍した留守の丹後は、西軍の攻撃にさらされるようになった。

七月二十日に西軍の丹波福知山城主小野木公郷らの率いる軍勢が、細川幽斎（藤孝）が立籠る田辺城を包囲した。攻城側の武將の手勢は一万五千余を数えたが、細川家の主力は忠興とともに会津遠征の途にあり、籠城軍は五百余で苦戦は目に見えていた。

三成の挙兵を知った忠興は、丹後の父幽斎を案じて七月廿一日、木付城にある康之に

…此状参り次第 松井と市正は 番子まで残らず召連丹後へ越さるべく候…
（忠興書簡）

と、田辺城の救援を命じる書簡を送った。「木付城の守備兵（番子）まで残らず率いて丹後に向かえ」と言うの

川家との離反を求めた一文である。連署状の署名の前田玄以外の増右は増田長盛・長大は長束正家のこと、いずれも大坂五奉行である。

「大谷刑部少輔書状」も家康の違背の条々をよく見て

…太閤様連々の御恩賞の段々き事

御忘却無く候はば 早々此方へ御上り候て

盛法印に御入り候はん事尤存じ候

随分馳走申すべく候…

秀吉の恩顧を忘れていないならば即刻大坂（盛法印）に登ることであり、厚遇をもって迎えるとの誘いである。盛法印とは、康之の妹婿京都の吉田盛法印浄慶の事であるのか。

これらの勧誘に対してに対して、

…返答も申すに及ばず 其趣早速加藤・黒田両家へ相達し申候…
（松井家譜）

である。忠興の切羽詰まった思いが感じられる。市正とは魚住昌永のことで有吉に次ぐ松井家の重臣である。

肥後の加藤清正は、松井氏の危急を察して、

…其元に四良右老人残され置き 松佐早々丹後へ御越し尤に候 か様にこれ有るべきと存じ …其元 人少にも候はば これより似合いの番衆をも合力申べく候間 必ず御越し有るべく候 其たを以て飛脚申候…

松佐（松井佐渡守）は四良右（有吉四郎右衛門）一人残して直ぐに丹後に立つべきである。そのため木付城の守備が手薄になったら必要な番衆を遣わして加勢する、とわざわざ飛脚をよこして丹後へ立つように促した。

しかし、もはや上方は西軍の勢力下にあり、このような状況下では船や水夫も得難く上坂は不可能であった。結局康之は黒田如水の勧めもあって木付に留まる外はなかったが、

前記忠興の書簡にはつづけて

：四良右 其外の者どもの儀は 其の国のていを見合
成るべきほど木付に候て 其上ハ如水居城へうつ
べく候 如水とかねて申合てをき候：

木付城の守備は残留する四良右（有吉四郎右衛門立行）
にまかせるが、康之の留守中に、もし異変が起こればで
きる限り城に踏み止って防戦し、致し方なければ如水の
中津城に移るように約束ができています。とも書かかれて
いる。先に述べたように佐田で如水と会談した際に取り
決めていたのです。

ところで「田辺城籠城図（永青文庫蔵）」を見ると、
東西南の三方に攻城側の武将十五人の名が記載されてい
る。この中には攻城前から家康に通じていた者や、風流
の道でかねてより幽斎を師とする武将の名もある。中に
は、豊後竹田の中川平右衛門（秀成の代理）・府内の早
川長政・隈（日田）の毛利高政や、細川忠興の妹婿になっ
た姫路城代木下延俊（後の日出城主）の名も見える。

：（丹後では）幽斎居城一つにして 堅固に相踏まる

木付城の請取りを命じたのである。八月十三日、一成は
家臣の小倉長斎を使者に立てて

豊臣家奉行人連署状 慶応五年八月 四日

宇喜多秀家・毛利輝元連署状 〃 八月 四日

太田一成書簡 〃 八月十三日

など三通の書簡を持たせて木付城に向かわせた。

「豊臣家奉行人連署状」は、長束正家（長大）・石田
三成（石治）・増田長盛（増右）・前田玄以（徳善）な
ど大坂奉行の四名の署名入りで、西軍に味方する武将の
面々や家康に加担する武将の妻子を人質に取ったこと、
丹後の田辺城の苦戦のことなどをあげて、終わりに

：貴所の事 太閣様別て御目に懸けられ 知行等まで下
され候間 秀頼様へ御忠節これ在必き義候 様子に於
ては太田美作守方へ申渡し候て差し下し候 其の郡の
事速に明渡さるべく候 何かと候ては然るべからず：

例のごとく秀吉の恩顧を述べて、出方によっては速見郡
を太田美作守に下げ渡すのという脅迫状である。

旨 中村神左衛門方より去廿五日書状到来候：

（松井文書四三四）

木下延俊の家臣である中村神左衛門は、康之にたびたび
田辺の状況を知らせてきた。木下延俊は田辺城に籠城す
る義父幽斎と通じていて、田辺城の情報を流していたの
である。また、黒田如水も遠征中の細川忠興や田辺城の
細川幽斎との連絡を密にして、康之へ書簡で逐一情報を
流している。籠城方と内通する武将の多い攻城軍は氣勢
があらなかったようである。

幽斎は田辺城を堅持し、二か月もの間籠城したが、や
がて後陽成天皇が幽斎の歌人としての才能を惜しんで開
城を勧告し、幽斎がそれに応じる形で九月十三日ようや
く攻防戦が終わった。

木付城明渡し画策（臼杵太田氏）

康之の西軍加担に色よい返事を得られなかった大坂奉
行は、木付城を奪取する実力行使に出た。

豊後の西軍の一角である臼杵城主太田一吉の子一成に

西軍の将である「宇喜多・毛利の連書状」も、ほぼ同
じ内容である。「太田一成書状」は、まず、西軍の優勢
を説き

：其れに就き 其の御城 拙子請取り申候様にと 御
奉行衆にし申付けられ 前後存ぜず候へ共昨日罷か
り下り候 則御奉行衆御折紙持ち進ぜ候 御返事に
より重て 御意を得べく候：

委細小倉長斎に申含み候間云々：

自分に木付城を請けとるようにとの、奉行衆の命を受け
て昨日大坂より帰曰したこと、家臣の小倉長斎を使者に
立てた奉行衆の書状を持参させたことを延べ、要する
に一成に木付城を明渡しして西軍に下るように申し送った
ものである。

これに対して、使者と対面した様子を泰之は、

：康之被見の上則使者へ対面仕り 各々当城に於て切
腹と存じきめ候間 別て返答これ無く候 然る上は書

状共に留め置くに及ばぬ旨申渡し 長斎へ投返し重て使者越られ候へば打ち捨ての旨申聞し 城外へ追出させ申候…

つまり、城を守って切腹も覚悟していた康之は、開城を拒絶して書簡を長斎に投げ返し、以後の使者は打ち捨てる旨を伝えて城外に追い出したと、『松井家譜』は伝えている。

城請取りに失敗した太田一成は、深江（日出町）に出城を構築して武力制圧に出ようとしたが、事前に康之に察知されて、これも失敗におわった。

このように、大坂奉行は城請取りの強行手段に出る反面八月十四日の増田長盛書簡のように

…羽越（細川忠興） 此中心違…

其方妻子なども盛法印に預置候…

貴所一身の昧にて上られ候はば 幽斎事なども申談じ度く候…

上関辺まで下られ候由 我等所へ申越し候間 城中御用心 百姓等に至まで御油断有るまじく候…

（清正より康之への書簡 慶長五・八・廿八）

康之は、さっそく清正の手紙で吉統が秀頼の命で木付城を請取るために豊後に下向したことを知った。

慶長三年秀吉が没し、翌四年、吉統は罪を許されて旧領回復の機会が訪れた。

吉統の赦免は、秀吉の死後武断派の諸将が朝鮮での武功吟味を担当した石田三成に反発して再吟味を要求した時に、黒田長政があえて吉統の在陣中の行動を擁護する発言をしたからであるとされる。（『大分県史』）

吉統が戸次川合戦で島津軍に大敗し、高崎城を捨て宇佐郡の竜王城まで逃れて秀吉の逆鱗にふれた時も、黒田如水の取りなしで、辛くも豊後一国を安堵されたといわれる。また一時ではあったが如水のすすめでキリシタンに改宗したこともある仲であった。

もともと、吉統の長子能乗が徳川秀忠に仕えて会津遠征に従軍している関係上、黒田如水と吉統の間には、自

などと主人筋の羽越を、太閤の御恩を忘れた不忠者であると非難し、康之が忠興と離反して西軍に下る正当性を説いたものもある。また、妻子を人質に捕らえたこと、さらに西軍に下るならば、丹後田辺城に籠城して苦戦している幽斎のことを考えてもよいとの懐柔策も弄した。幽斎（藤孝）と康之は姻戚関係にあり、二人はかつて幕臣として足利義昭を將軍に擁した朋輩である事を慮ったことである。

計りかねる吉統（義統）統の真意

太田氏に命じたの木付城奪取が失敗にきした西軍は、豊後国攻略のために大友吉統を派遣した。毛利輝元が秀頼から「木付城を与えて旧領の再興を許可する」という御朱印をもらって吉統を帰国させる挙に出た。吉統は輝元から兵船と鉄炮隊百人を与えられて豊後に向かったという。

急度申入候 其城の儀 大友方へ秀頼様より遣されの由に候て（吉統を）差し下の由候…

らも東軍に味方して機をみて豊後に入る密約があったといわれる。（『大友家文書録』）

吉統の唐突の変心は、側室の伊藤氏と末子正照が大坂方に拉致されて、空手形にしても豊後一国の安堵を約束されたことにより、止むなく毛利輝元の誘いに乗って西軍に組する決心をしたのであろうか。縁戚にあたる岐部又兵衛夫婦への「ふとふとぶんどへくだり候」という書簡に優柔不断な吉統の心情がうかがえる。

旧臣吉弘嘉兵衛統幸は、吉統の意をたいして能乗に仕えるべく江戸へ登る途中であった。竹田の田原總忍や宗像掃部も吉統が如水とかわした盟約があるので、東軍に加担するものと信じて疑わなかったようである。主君の変心は、旧重臣に大きな犠牲を強いることになった。

ともあれ、石垣原の合戦は太田氏による速見郡奪取に失敗した大坂方が、吉統の旧領奪回の野望を利用して仕組んだもので、太田氏が木付城入手に成功していれば、もともとなかったものと思われる。慶長五年の大友入国は必然的な宿命でなく偶然の運命であった。

岡藩中川氏の動揺

竹田(岡) 六万六千石、中川家の動向は豊後の形勢を左右する鍵を握っていた。

中川秀成は、池田輝政を介して家康方に組したといわれる。

一説には、慶長五年四月、登坂して会津遠征に参加する旨家康に申し出たが、「西国表の儀心元なく、西国居城のことなれば頼み思召す間、同志の輩と申し合わせ忠節」をつくしてほしいとの返事があり、七月二十日岡城への帰城を命じられたといわれる。にもかかわらず、七月二十五日に家老の中川平右衛門長祐が、兵七百人を率いて登坂した。表向きは家康の会津遠征軍に参加するためというが、秀成が家康に帰国を命じられていたとすれば、中川氏の行動としては腑に落ちない。

すでに伏見城が落城して、三成の絶対的優勢下にあった上方に、東軍の旗印をもつ平右衛門長祐の居り場はなかった筈である。先にあげた「田辺城竈城図」の攻城側に中川平右衛門の名が見えるのも、田辺に参陣した確証はないとはいえなんとも釈然としない。

れ二千石余の知行を与えられて、秀成の与力(付属の武將)として岡に封じられた武將である。兩人は中川秀成の配下にあるとはいえ、秀吉より個別に朱印を得て御職を授けられた知行主であった。

吉弘嘉兵衛統幸と同じように、田原・宗像は旧主大友吉統は東軍の家康に加担するものと信じていたのであるうか。秀成と同じく東軍支持の起請文を黒田・加藤・松井に差し出していたのである。

合戦後に、田原・宗像の突然の裏切りに対して、康之がそのことを秀成に糺した書簡の返書がある。

：妻子共引越され候へと申仕り候へば 此間残らず差越され候間心安に存じ候つる

然らば 其後 兩人より申越し候は 吉統下国の事に候 久敷なじみにて候間 一夜帰に見廻い度く候

殊更如水公へ申談じ子細候間 吉統へ参候て左様の儀共をも入魂申度き由候間 先此方へ越され候へ談合申すべしと申遣せ候へば ； 一夜帰に参罷り帰り候と申され置濱沖へ参られ候様子口上申含候間 申達べく

康之の七月晦日付の細川忠興への書簡に、

一中修理(中川秀成)今に上られず候 四五日以前平右衛門上られ候 妻子新駿(新庄直頼)へ奉行衆(により)預けられ候故あいしらい(相手に応ずるための行動)と聞へ申候 ； (松井文書四四五)

と、康之も秀成の妻子が人質に捕られたことを案じており、また八月十八日付の中川秀成起請文写の中に、「大坂方に人質に取られている母や妻の命を助けるため上洛を余儀なくされた」と書かれているので、西軍の執拗な勧誘に止むを得ず示した行動であったのかもしれない。

一方では、秀成は家康のいう「同志の輩」である木付の松井康之や中津の黒田如水、肥後の加藤清正などに書簡や起請文を送り、東軍支持の意志を表わすなど煮え切らない態度を取っている。

石垣原の合戦で中川氏の意に反して大友吉統の陣営に走ったといわれている田原近江入道紹忍と宗像掃部鎮次らは、大友家の改易後、文禄二年に太閤秀吉からそれぞ

候：

(中川秀成書状 九月十六日)

秀成は、田原・宗像兩人の妻子を人質に取って心を許していたこと。また兩人は濱沖(濱脇)に吉統を尋ね、如水の意向を伝えて東軍に加担するように説得し、岡へ同道して秀成も会談したいということを伝えてのうえで、一晚で帰岡する約束であったので、兩人を信じて疑わなかったと弁明している。

にもかかわらず、秀成の与力の二武將がこともあろうに中川家の旗指物まで偽作して、大友吉統の許に馳せ参じたことに当惑しているかのような態度をとっている。

とはいえ秀成の態度には疑問が残る。九日に浜脇浦で吉統と会談した紹忍や鎮次が吉統に味方して参戦するには、兩人の知行地から一族郎党を立石の本陣へ移動させなければならぬ。この緊迫した時局に武装集団の移動は秀成が察知して阻止できる筈である。思うところがあったに取えて見逃したのではなからうか。

また、秀成自身が参戦できなかった理由として、「秀成ハ兵ヲ出サムト欲スルモ；長祐等未ダ帰ラスシテ兵ニ

乏く如何トモスル能ハス」と苦しい弁明をしている。しかしながら、『松井家譜』には「秀成は初より大坂方にて御座候へ共、御一戦の模様を見合わせ、病気の由にて人数を出し申さず候」ともある。最後まで態度を決せず様子を伺っていたことは否めない。

加藤清正はこの秀成の背信を責めて、小西行長の居城宇土城を攻略したのちに、自ら岡城を攻めることを主張したという。結局、合戦後に黒田如水が中川は「大友家に一味なり」と注進したので疑惑が家康の知るところとなり、中川は東軍味方の証として豊後西軍の拠点臼杵城の太田氏を攻撃するという過大の代償を払うことになった。

豊後諸藩の動き

木付城の松井佐渡守康之を包围する諸藩の中で、西軍方を明確にする太田飛騨守一吉・垣見和泉守一直（東国東）・熊谷内蔵允直盛（同）以外の四氏は、東西いずれに付くか態度を決めかねていた。康之の七月晦日の記録では

国東郡の垣見・熊谷は、留守居を残して主力は西軍の岐阜大垣城に立てこもり東軍を迎え撃って破れた。

大友吉統軍の手勢

田原紹忍や宗像鎮次と同じく、柳川城主立花宗茂のもとに身を寄せていた吉弘加兵衛統幸も、安岐吉統に面談して黒田氏との盟約を守ることを諫言したが、ことごとく吉統に押し切られてしまった。止むなく統幸は死を決して吉統の味方になったと云われる。

さて、改易後八年も経た慶長五年（一六〇〇）に、吉統の改易が許されて旧領が復帰する機会が来ようなどと



吉弘統幸像 個人像

一竹豆州は在国 是れ又當城へ別て御心副えられ候
妻子今に大坂に在候条 御氣遣い迄候事

（松井 文書四二八）

竹中伊豆守重利（豊後高田）は、木付城の康之に「御心を副えられ」ていることから、腹は東軍方につくと踏んでいる。事実、竹中重利は黒田軍に同心して木付城救援軍に長子と二百の手勢を与えている。

また、府内の早川主馬首長敏と隈（日田）の毛利民部太輔高政の両氏は「田辺城籠城図」にあるように丹後田辺城攻撃に参加はしているが、内心は東軍に傾いていた。康之の八月二十八日の記録によれば、国元においては康之が両藩の留守居と内通していた模様が窺える。

一早主馬 丹後へ立たれ由に候へ共 内右衛門（長敏の兄）は一段疎略なく 万事心付にて御座候事

一毛民太も丹後へ立たれ由に候 是も留守居ハ當城へ
申通じ候事 （松井文書四四五）

考えたものがあるうか。旧主大友吉統の呼び掛けに呼応して馳せ参じた手勢はどの位いたであろうか。立石村の古屋家に残る古文書に

：諸方に軍勢才足におよへども 未だ来：
（さいそく いまだ）

とあるのは事実であろう。

文禄二年（一五九三）、豊後国を改易されて主君を失った大友氏の旧家臣団は、翌三年、中川氏の入国を阻止する志賀親善の残党が赤岩で戦闘に及んだ事件があるが、残存勢力は次第に衰えて、在国のまま新知行主に仕官するか、または一族郎等と共に帰農して郷士となるしかなかった。

野津原の郷士永富刑部少輔・与右衛門尉・九郎の兄弟（二代大友親秀の次男の戸次次郎左衛門尉重秀を祖とする）は、それぞれ逆修塔（生前墓）を建てて野津原郷の大友旧臣六十一名を率いて馳せ参じた。十三日、野津原郷士隊は十九名の死者を出し、与右衛門は刈田兵三郎に九郎は松尾主水に討れて討死した。「豊後永富家物語」

旧主の呼び掛けにあっても、「松井家譜」にあるように、木付の康之手勢の中にいた旧臣木付右馬允や都甲兵部丞、野原太郎左衛門などのように城内に足止めを余儀なくされた例もある。

九月九日、吉統は浜脇浦に上陸したが、ここは大船を繋留できる港湾ではない。大船は沖に滞船して舢舨で瀬渡せねばならず、満潮時朝見川の川口にやっとな横付けできる程度の船では、運べる兵員や武器は知れている。

西軍から与えられた鉄炮足輕隊は、豊後深江港に着岸したが直ぐに大坂へ逆戻りしたという。備兵達は、かつて秀吉に「天下一の臆病者」という烙印を押された吉統を見限ったの行動であらうか。それとも、事前に言い含められていたのであらうか。

松井康之が九月十日に中川修理太夫秀成に出した書簡に、次のような如水の所見を紹介している。

一吉統下向の義仰せ越され忝存じ候 昨日此表へ舟にて相働き候 一揆頼にて候条 卒尔に人数出し申候 義無用の由 如水より堅く仰せ越され 見極め注進

申すべき由候間 示し合わせ討果し申すべく候事：

如水の思惑は、吉統の手勢は組織だった正規の軍団ではなく、寄せ集めの集団（一揆）であるから、急いで行動に出る必要はない。状況を見極めて討ち果たすべし、とのことであった。如水は十日の段階ではまだ吉統の西軍加担の真意を見極めかねていたのではないだろうか。大友勢の正確な数を伝える史料はないが、即戦力となる兵員を多く見積もっても九百余、ある記録には七百余というが、よくもこれだけ集めたことである。

大友吉統軍の頭立つ武将の名前は「大友義統衆討死交名」にその一部をうかがうことができる。

義統ノ衆討死分

吉弘加兵衛	宗像掃部	木邊左近
竹田津志麻	清田味左衛門	豊饒新助
上野六郎	原田舎人	深津七右衛門
下郡治部	今村喜介	今村弾助
富来兵内	吉良傳右衛門	原田勘右衛門
田尻吉蔵	伴 覚右衛門	小田原又左衛門

永富与右衛門	野上小次郎	一万田右京
柴田次右衛門	〔夜木付松井佐渡城にて討死〕	

が加わる。これらの武士が大友勢の過半数以上を占めていたのであらう。

いずれにしても、如水は「一揆頼み」の手勢と侮った寡勢に、緒戦で思わぬ敗退を喫することになる。

合戦の状況

合戦の前哨戦は、吉弘加兵衛統幸の木付城攻撃に始まった。九月十日、吉弘は国東の傍輩とともに安岐を立て、松井康之が立籠る木付城に夜襲をかけた。

木付城では百姓丸に居合わせた松井の家臣中川下野・井口六兵衛・下津半右衛門・坂本三郎右衛門・杉崎作左衛門・今井惣兵衛の六人が吉弘の先鋒を発見して応戦した。

折しも、如水は高田城を攻めて竹中氏を従え、富来城を攻撃中であつたが、木付からの援軍要請を受けて赤根峠から先遣隊を木付におくった。如水も安岐城攻撃を中

都合五拾四人かしらぶん（頭分）
右之外かしらぶんの者ておい（手負）八十計御座候由候
九月十五日

他の一文（石垣原戦陣図―福岡市博物館蔵）には、この他に

山下不菴

木村図書

竹田津九郎

止して木付城に向かった。

黒田の来援を知った吉弘隊は、急遽立石に引きあげて大友本隊に合流した。

この時、吉弘の手勢百余といわれるが、木付城で中川下野ほか五人が城外に出て渡り合った程度での人数であるから、百人余は誇張であらう。

松井康之が率いる細川軍の重立った将は、

松井康之（騎馬十四騎、雑兵百余入）

有吉立行（騎馬八騎、雑兵百三十余人）

魚住市正（鉄砲三十挺頭）

魚住右衛門兵衛 松田七右衛門 河喜多藤平

桑原才藏 可児清左衛門 岡本源三郎

速水孫兵衛 上村孫三

松井は木付城の請取に召連れた手勢のうち、忠興に従軍した長子興長に七騎、雑兵約百余を分遣しているのので、残る手勢の総計は二百余、とは云え百五十石から三百石取りの上・中級家臣の精銳が揃っており、実際彼らの働

戦場であった。また、現在見るように雑木の茂みが遮蔽物となって銃撃戦にも向かない戦場でもあった。

緒戦は、大友軍足輕隊の銃撃戦で始まった。血気にはやる黒田軍の久野・曾我部・母里・時枝の一番備が、敵前線に突撃をかけると、康之の率いる細川隊も遅れじと実相寺山中腹の陣を駆けおりて合流した。

連合軍の先手が友軍の先鋒を境川近くまで押し返し敵と鎗際まで接近すると、敵軍の激しい銃火を浴び、たちまち吉弘統幸・宗像掃部の主力に挟撃されて押し返された。黒田隊は算を乱して犬の馬場まで退却した。この戦闘で黒田隊の若武者久野次左衛門と曾我部五右衛門が戦死した。

黒田隊が本陣の角殿山の陣を指して退却する中で、細川隊はどうか戦線に踏み止まり、一塊となって奮戦した。大將の松井康之は、みずから鎗をふるって白兵戦に臨んだが敗色濃く、遂に討死を覚悟するが、通りかかった黒田隊二番備の将井上九郎右衛門に「懸かるも引くも大將の心得なり 似合わぬ深入り沙汰の限りに候 急ぎ打入り申され候え」と、陣地へ退却するよう諫言され、

きは大きかった。

黒田軍の諸将は一番備、久野次左衛門・曾我部五右衛門・母里與三兵衛・時枝平太夫。二番備としては井上九郎右衛門・野村市右衛門・後藤太郎助の面々で、兵員二千余であった。〔松井家譜〕

彼の実力は、八年以前の文禄の役で大友軍は黒田長政の指揮下で共に戦った仲であるから、互いに知りぬいていた筈である。

九月十三日、石垣原の戦闘は、〔松井家譜〕によれば正午に始まり午後六時頃まで続いた。その間大きな戦闘は三回行なわれたとされる。石垣原は、

…石垣原は南下りに一里の野中と申候得共、長く相見横は実相寺山立石の間二十間もこれ有るべし 草短く縄を張たごとく堅横に荊蕀生じ 土地の高下これ有り石高の地にて足場悪敷…〔松井家譜〕

この扇状地は、名のごとく大小の岩石と一面茨におおわれた高低の多い草原で足場が悪く、騎馬戦にはむかない

やむなく実相寺山の陣に退却してことなきをえた。

角殿山や実相寺山の麓には、吉弘・宗像軍が追撃して肉薄し細川隊の本陣へ激しい銃撃を浴びせた。

やがて、黒田隊の敗退に奮起した井上九郎右衛門・野村市右衛門など二番備軍の鎗隊が、古畠の土手に屯して休息する吉弘・宗像隊を目掛け突入した。この戦闘で吉弘加兵衛統幸と宗像掃部鎮次の両将が討死して大友軍の敗色は濃厚となった。

両将の討ち死を知った大友吉統は立石本陣へ引き上げて、十三日の戦闘は終わった。

夜は雨となり黒田・細川勢も帰陣、間もなくして如水が本隊を率いて実相寺山頂の本陣に到着した。

翌十四日 如水は吉統の縁者（妹婿）である母里太兵衛を使者に立てて、吉統に降伏を勧めた。

十五日、吉統はこれに応じ海雲寺で剃髪して如水に投降した。石垣原を戦場とする細川・黒田連合軍と大友軍との戦いはここに終結した。

康之と盟約のあった加藤清正は、宇土城の小西行長軍と対峙しているにもかかわらず、石垣原の松井氏の援護

に自ら主力を率いて熊本を出発している。

…御手前機遣に存 聞かけに出陣候處…

十四日に吉統の豊後到着を聞き、ただちに熊本をたち、十六日に小国で木付城夜襲の一件を知った。「存外の悪路」を駆けて明後日の未明には立石に到着して、

…吉統の事は申すに及ばず 是非紹忍・掃部首は我々
のものに討捕せ申度く候…
(十六日書簡)

と、なみなみならぬ決意の書簡を送った。そして翌十七日玖珠郡のひきち(引治村)に到着して黒田・松井両軍の勝利を知った。

…其元相済み候由承り 満足せしめ候
尤 其元へ参り 如水へも各々へも御目に懸るべく候
へ共 我等も手前の事候間 急ぎ是れより帰国せしめ
候…
(十七日)

余の松井隊だけで九百余の大友軍を撃退することは不可能に近く、合戦の勝利は黒田の軍事力に依るところが大きかった。

木付城を預かる松井康之は、西軍の執拗な勧誘にめげず、大藩に屈せぬ気迫で豊後東軍の首魁太田美作守一成をまず退けた。康之は、二百餘騎ながらこの合戦の主体は、あくまで細川領を確保する佐渡守康之自身であるという自覚のにも、常に合戦の前面に打って出る覚悟であった。

『松井家譜』によれば、木付から立石に進撃する時、かのう(鉄輪)山の麓で中津隊の時枝軍と先陣を争った康之は「此方は身に請けたる敵にて候」と譲らず、井上九郎右衛門の仲介で止むを得ず鬨を並べて鶴見村に入ったと書かれている。また、緒戦で黒田軍が大崩れした時も、康之の率いる細川勢は討死にを覚悟で戦線に踏み止まって奮戦し、井上九郎右衛門の諫言を容れてやっと退陣したといわれる。主家の面目を担って大友に対抗する康之の気概が感じられる。

敗退する中津軍を犬の馬場まで追撃してきた吉弘・宗

と清正は戦勝の祝詞を述べるとともに急遽陣を返して、宇土城の攻略にむかった。

石垣原で勝利したのち、康之は如水とともに安岐城・富来城を攻めて開城させた。また、府内城・隈城両城ともに抵抗することなく降伏した。

中川秀成はさきに述べたように、紹忍・掃部の裏切りや優柔不断の態度が家康の知るところとなり、その疑惑を晴らすため西軍方の臼杵城を攻撃することになり、多大の犠牲を払って太田氏を追放した。

大友左兵衛督と松井佐渡守の立石(石垣原)合戦

黒田家の儒者貝原益軒の「豊国紀行(元禄七)」を初めとして、「豊後乱記」「大友興廃記」など当地の記録や伝承にある石垣原(立石)の合戦は、大友吉統左兵衛督対黒田如水の構図で語りつがれて、松井佐渡守康之の影は薄い。

そもそも合戦の大義名分は、東軍に組して細川の所領を守護する木付城主松井康之と、西軍に組してこれを奪おうとした大友吉統の決戦である。しかしながら、二百

像勢は、角殿山にある中津軍の陣には目もくれず、細川軍の幟が揚がる実相寺山を「本陣と存じ(攻)寄」せたと『松井家譜』にある。大友氏が当面の敵としたのは細川家臣の松井隊であったことに疑いはない。

しかし、この合戦の勝敗は大友吉統と松井康之の立場を大きく分けることになった。

石垣原合戦の戦功を記した如水の書状(松井文書四五九)が家康に届けられ、十月十一日大坂に到着した康之は、家康に拝謁して改めて御褒めのことばがかけられたという。豊後で東軍の只中において孤軍奮闘した康之の功績が認められのである。

一方、黒田の軍門に下った大友吉統は、中津から江戸に送られ、家康によって出羽の秋田実季にあずけられ幽閉の身となった。翌七年実季が常陸宍戸に移封されてこれに従い、慶長十年、四十八歳で没した。

不思議な吉統の軍忠状

最後に解しかねる一文書がある。大友吉統(宗厳)が九月十三日に吉田三右衛門後の奥田勘兵衛に遣わした感

状で、働きにより知行地を増加する旨が書かれている。

「大友宗厳ヨリ賜ル感状 吉良三右衛門、後奥田勘
兵衛ト改候 後 輝政卿へ被召持 松平右近太夫
様之御家老ニ被仰付候 奥田豊右衛門養父ナリ」

豊後於立石表

黒田如水合戦之

刻 於眼前鎗下之

高名感入候 彼表

取納次第 本地之儀ハ (本地は知行地)

不及申 一廉加

増可申付候 辛勞

之統聊不可有

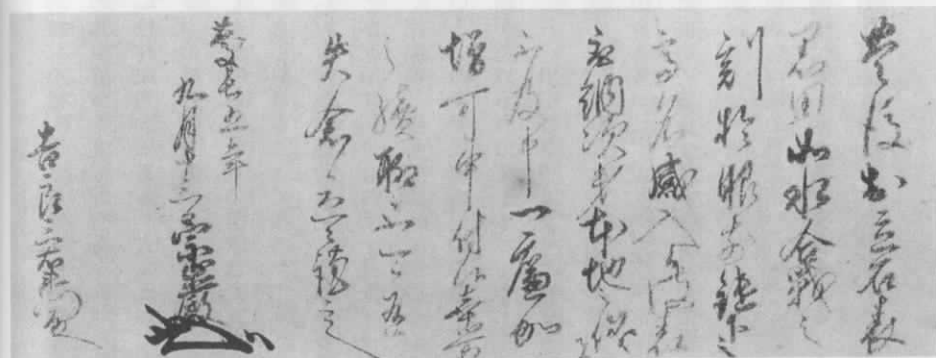
失念候 恐々謹言

慶長五年

九月十三日 宗厳 (花押)

吉良三右衛門殿

(福岡博物館蔵)



十三日の合戦後、本陣に引きあげて古屋敷で認めた
ものであろうか。吉統はこの日の戦闘で多くの兵を失っ
たにもかかわらず敗戦を認識しなかったのであろうか。
偽書でなければ解しかねる文書ではある。合戦後、吉統
は自害を望んだとの言い伝えもあるが、この軍忠状とは
明らかに矛盾する。

果たして吉統には後口に成算があったのであろうか。

股肱と頼む宿将、吉弘統幸・宗像掃部を失い、野戦で
の戦闘力を著しく喪失した吉統は、或いは前面の懸崖に
守られ立石に籠って二、三日防戦し、戦運が好転するの
を待つべしと考えたのであろうか。

たしかに吉統が大坂を立つ頃の上方の状況は西軍絶対
の優位にわいていた。

如水は十三日の合戦で大勝したが、黒田軍の主力は長
政の下に上方にある。中津城も構築半ばで工事は中断さ
れているし、小倉の毛利勝信に背後を脅かされているの
で、立石で長期戦に備える猶予はない。

一方、加藤清正は宇土の小西を討つことが焦眉の急で
あり、西軍の柳川 (立花)・久留米 (毛利) と対峙して

いる現状では長期に他領へ援軍を送る余裕はない。

振り返ってみれば、豊後の諸大名は太閤以来西軍の味
方である。吉統は安岐から臼杵に使者を送ったので、多
少でも持ち応えれば太田一吉の援軍が駆けつけるし、そ
うなれば日和見の中川の動きにも期待が持てる。その内
に上方での抗争は西軍の勝利に終わると確信していたの
であらうか。

持久戦こそが、黒田・加藤軍の弱点として成算を立て
ていたのかも知れない。

結果ではあるが、頼みにする臼杵の太田氏がついに動
く兆しすらなかったし、一方熊本を出た清正軍が背後に
迫っていたのである。

また、降伏した吉統は、如水に家康に対して二心なかつ
たことをめんめんと述べて取りなしを嘆願したといわれ
る。恭順すれば再興が叶うと期待したのであろうか。或
いは戦国特有の権謀術数が各方面に巡らされていたのか
も知れない。

「大友家文書録」によれば、かつて秀吉から与えられ
た吉統の妾少納言局は伊藤甲斐守の娘で、豊後改易後に

後陽成帝（後水尾帝）の乳母となって禁庭に登っていたという。吉統のかつての赦免は、黒田長政の抗弁と朝廷に近い少納言局の嘆願の効果が大きかったかのようには書かれているが、再起の期待はこの辺にもあったのではないだろうか。

歴史に「もし」は無意味であるが、敢えて、もし大友吉統が豊後入国後、黒田や松井と組んで東軍に加担していたならば、戦後の恩賞として少なくとも臼杵六万五千石か速見一郡の知行を与えられていたかもしれない。

その後の松井家

康之は十月八日に木付を出船。十一日大坂で家康に拝謁して、八ヵ月ぶりに故郷の丹後松倉へ帰城した。

十一月二日、細川家は豊前一国と豊後東国東・速見の二郡三十九万九千石が与えられ、丹後から豊前へ国替になり小倉城に移った。

翌慶長六年十月、康之は忠興から豊後国木付城を中心とする約二万五千石の知行が与えられて、以前と同じように城主格の地位が確保された。ちなみにこの間、別府

の村々の大部分は松井氏の支配下にあった。

慶長十七年一月、康之は木付城で六十三才の生涯を閉じた。その後嫡子興長が同城を居城としたが、元和元年の一国一城令によって木付城が廃城となると、小倉屋敷に引移った。

寛永九年、細川家は肥後熊本へ国替えになり、正保二年、松井興長は藩主光尚^{みつな}の意向により忠興（三斎）の居城であった八代城が預けられて幕末に至るのである。

参考文献

「康之様 記録之部 壺」『松井家譜』

「関ヶ原と九州の武将たち展（史料）」八代市立博物館
「松井家三代展（史料）」

「立石一件」 熊大付属図書館

大分県史（中世編） 大分県

大分県の歴史 渡辺澄夫

別府市誌 別府市

（文中にあげた書簡は、八代博物館展の史料に掲載された書簡の写真を読下し文にしたものである。）